



iPadの管理と運用



持ち帰り学習

家でも安全に学べるように
設定する

2022年4月

目次

はじめに	3
iPadを持ち帰るメリット	4
持ち帰り実施前に検討しておくこと	6
関連資料(保護者案内用)	13
事例から学ぶ	14

はじめに



iPadは、私たちの創造性と可能性を広げるきっかけを与えてくれます。生徒たちは何かを作り出すことに夢中になり、自分らしく表現することを通して学びを深めていくことができます。しかし、限られた授業時間の中だけで創作活動を行うには限界があり、生徒たちの意欲や探究心に応えきれないこともあります。携帯性にすぐれ、簡単に使えるiPadを「学校の中」だけに限定せず、家庭に持ち帰り、いつでもどこでも学べる環境を提供できれば、生徒たちは簡単に「創り手」になれ、リモートでの協働学習も容易に行えます。教師のみなさんも、魅力的な教材作りや課題確認を隙間時間を使って行えるようになり、作業効率がアップします。このような環境を実現するには、セキュリティやプライバシー、長時間にわたる使用など、トラブルから生徒たちを守るための準備がとて大切でです。本資料では、教育機関が保有し、管理するiPadを教師や生徒たちの自宅に「持ち帰り」、生徒たちがそれぞれの強みを発揮できる機会を提供すると同時に、教育委員会や学校にとっても安心で安全な環境を整備する方法を紹介します。

iPadを持ち帰るメリット

iPadを学校から自宅などに持ち帰るメリットは数多くあります。そのメリットは、学校や教師のみなさんにとってだけでなく、生徒や保護者にとっても非常に大きいものです。

学習の多様化、個性化

学び方や学ぶペースは人それぞれです。学習用デバイスは、文部科学省の掲げる「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」という教育ビジョンを達成するために整備されました。個に応じた学びを実現するため、AI型のドリルの活用や、グループでの協働学習を通じた教え合いといった活動も行われています。

生徒が自分自身で課題のある領域を克服したいときや、興味がある内容を正規の教育課程の範囲を超えて探究したいときには、一人ひとりに合わせてカスタマイズされた課題に取り組むことが効果的です。しかし、学校において授業やホームルーム以外でそのような時間を用意するのは簡単ではありません。そこで、デバイスを持ち帰ることで、じっくり時間をかけて理解を深めたい生徒も、より高度な課題に挑戦したい生徒も、どちらの学習の機会も大きく広げることができます。

iPadは誰もが持つクリエイターとしての才能を引き出すのに最適なツールであり、家庭学習のあり方を考えるきっかけを与えてくれます。時間を気にせずビデオを作成したり、試行錯誤を繰り返しながらスケッチやプログラミング、音楽制作に取り組んだり、リモート環境下でもクラスメートと「共同制作」機能を使ってプレゼンテーションスライドを仕上げたり、グループで文書を確認し合いながらレポートを完成させることも可能になります。

iPadには優れたアクセシビリティ機能も搭載されており、身体が自由に動かせない方でも音声でiPadをコントロールしたり、弱視の方が操作の補助にVoiceOverを利用するなど、さまざまなサポートが利用可能です。これらの機能を学習に活かすことで、すべての生徒たちが、これまでであれば難しいと考えられていた領域に自分の力で挑戦する機会を手にすることができます。

新しい学びのあり方を保護者に伝える

学校からiPadを家に持ち帰ることで、学校で起きている出来事を保護者はより多く知ることができます。生徒たちが撮影した学校の写真やビデオを見ることはもちろん、授業で何が行われていて、どのような課題に取り組んでいるかを詳しく知ることができます。

さらに、iPadがあるからこそ可能なクリエイティブな課題などを通じて、子どもたちの才能が可視化されます。それぞれが得意な方法で、家庭でも興味関心のある領域の理解を深めたり、創作活動を継続することができれば、大人の想像を超える学習成果物が出来上がります。

小学生であっても写真やビデオを編集し、自分たちの考えやアイデアをクリエイティブに表現する様子に触れたとき、多くの保護者は感動し、1人1台のiPadを教育に取り入れることの重要性をはっきりと認識することでしょう。また、教科内容や作品について、家族にアドバイスを求める機会も増え、iPadを介したコミュニケーションも発生します。

こうした教育を実施する前は、保護者の理解が得られるかどうかという懸念がつきものです。実際に、1人1台のiPadを早い段階から導入した学校の多くも、保護者の賛同を得ることがiPadの持ち帰り検討時の重要項目でした。学校の取り組みを保護者やコミュニティに応援してもらうためには、このような個別最適化された創造的な学びを展開し、その意図や意義を事前に説明することがとても重要です。

休校への対応

新型コロナウイルスの感染拡大は、学校教育の重要性をさまざまな形で示してきました。今後も、急な休校や学年・学級単位での閉鎖が行われるリスクがあります。そのリスクは感染症だけではなく、自然災害などによって突然やってくる可能性もあります。そうした際、学校でリモート学習などを取り入れて教師や生徒のみなさんが学びを継続するのに、iPadはパワフルなツールになります。実際に、新型コロナウイルスの感染拡大が起こる前からiPadを活用した教育を行っていた学校では、2020年3月の全国一斉の休校開始から2週間後には各家庭の通信環境が整備され、リモートで授業が再開されていました。iPadの活用が日常的になっていて、それを保護者も「ごく当たり前のもの」と受け止めていけば、突然の休校でも学習は継続できます。クラスルームアプリケーションを使えば、教室にいない生徒のiPadの画面を確認したり、特定のアプリケーションやウェブページを開いてあげたりすることができるので、リモートでも授業時間内に一人ひとりに寄り添った指導を行うことが可能になります。

生徒の進捗を教師側で把握することも可能に

iPadの持ち帰り学習を実施する際に便利なのが、授業支援アプリケーションの「スクールワーク」です。スクールワークは、学校はもちろん、自宅でも、外出先でも、どこからでもアクセスできるバーチャルな教室を作り出します。スクールワーク上で教師のみなさんは、指定したクラスの生徒に対し、期限を設定した課題を一齐に送信できます。生徒は受け取った課題に取り組み、完成させた成果物をどこからでも提出できます。また、教師のみなさんは一人ひとりの生徒の進捗をリアルタイムで把握できるため、必要に応じて支援を行うことが可能です。

スクールワークでは、教師のみなさんと生徒との間でメッセージを送受信することも可能です。課題で困ったことがあったり、支援が必要な場合、生徒はスクールワークのアプリケーション内でいつでも教師のみなさんに相談できます。また、スクールワークを使うと、ファイルの共有を簡単に行えます。個別の課題を単一の共有ファイル上で行えば、生徒たちは自宅にしながらクラスメートの作品を確認し、インスピレーションを得ながら進めていくことができるので、教師に頼らず生徒間の学び合いで解決することも増えます。スクールワークについて詳しくは、「[スクールワークをはじめよう](#)」を参照してください。宿題だけではなく、授業そのものもリモートで行う場合、クラスルームアプリケーションを併用することで、リモートで参加中の生徒の様子を把握し、授業内で適切な支援を行うことができます。

管理の効率化

全員のiPadが充電され、1日の授業を滞りなく進められるようにすることは重要です。iPadは一度の充電で最大10時間のWi-Fiでのインターネット利用、ビデオ再生、オーディオ再生ができますが、多くの台数のiPadを少ない人数の教師の手で管理することは、かなりの負担になります。特に、長期休暇中にiPadを保管庫で充電し続けると、バッテリーの劣化が早まることがあります。

iPadを持ち帰り、各家庭で充電してもらうことは、教師のみなさんによる管理の手間を減らすことに繋がります。家庭でもiPadを活用する可能性があるため、事前に保護者に協力を要請し、生徒には翌日の授業準備の一部として「寝る前にリビングなどでiPadを充電する」というような習慣を身につけてもらうようにしましょう。こうすることで、生徒は学校でも家でも、いつでもiPadを存分に活用できますし、教師のみなさんも授業をスムーズに開始できます。

さらに、インターネットに接続できる環境が家庭にもあれば、アプリケーションやOSのアップデートを登校前に生徒側で済ませておくことができ、すぐに授業を開始できるメリットもあります。Wi-Fi環境を新たに整備する場合の補助金や支援なども活用し、保護者に家庭でのWi-Fi環境の整備をぜひ促してください。家庭にWi-Fi環境を用意することには、生徒や保護者が学校と常につながれるメリットもありますし、このように、持ち帰り学習が日常化すると、生徒はいつでもiPadを使ってちょっとした調べ物をすぐ行うことができたり、スクールワークや共同編集を通じていつでもクラスメートと一緒に学ぶ機会を得ることができます。

持ち帰り実施前に検討しておくこと

生徒たちに安心して安全な学習環境を提供するために、持ち帰り実施前には、以下のような項目を検討しておきましょう。

- 1.フィルタリング
- 2.iPadのセキュリティ強化
- 3.ユニークIDの使用
- 4.保護者への説明
- 5.紛失、盗難、故障時の対応

1. フィルタリング

生徒がiPadでインターネットを閲覧する際、成人向けウェブサイトやギャンブルに関する情報などの不適切な情報に触れないよう、多くの学校や教育委員会ではウェブフィルタリングを活用しています。ウェブフィルタリングにはいくつかの方法があり、それぞれにメリット・デメリットがあります。

	A iPad内の設定で フィルタリング	B 学校内の機器で フィルタリング	C 専用ブラウザで フィルタリング	D クラウドで フィルタリング
学校内での ウェブ閲覧制限	△	◎	○	◎
学校外での ウェブ閲覧制限	△	×	○	◎
価格	無償	有償	有償	有償
課題	許可/制限URLを個別に記載する必要があり、管理工数が大きい	学校の外では効果を発揮しない	専用ブラウザ以外フィルタリングが効かない。Safariなどを消去する必要がある	台数×単価で課金されるため導入台数が多いとコストが高くなる必要がある

まず、教育機関がフィルタリングを導入しているか、導入している場合はどのタイプを用いているかを確認します。その上で、「学校外でのウェブ閲覧制限」が適切に使えるようにすることが持ち帰りにあたって最も重要なので、現状が**B**の方式の場合（一例として、セキュリティアプライアンスを利用していたり、Wi-Fiのアクセスポイント、あるいはファイアウォールなどでフィルタリングを行なっている場合）は対処が必要です。

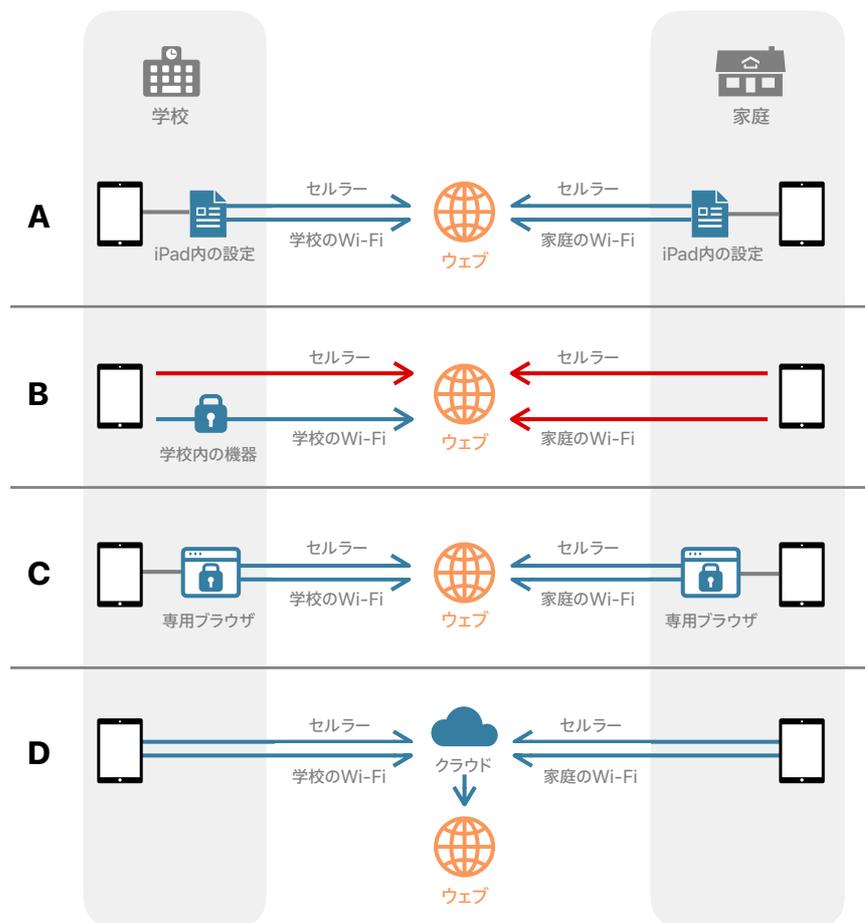
Aの方式はiPadの標準機能を使用しますが、成人向けウェブサイト以外は許可リスト／拒否リスト方式で個別にURLを記載する必要があるほか、端末上の個々の設定ファイルの更新が必要となります。MDMなどを併用することで省力化できる部分がありますが、設定変更が必要となるたびに個々の端末の設定データ書き換えが必要になるので、管理の手間が大きくなります。

Cは、あらかじめフィルタリング機能が組み込まれたブラウザアプリケーションをiPadにインストールし、それ以外のブラウザ（標準ブラウザのSafariを含む）を無効化することで制御する方式です。設定はクラウド上でを行い、すべての端末の設定内容が自動的に切り替わるので日常的な設定変更が可能で、持ち帰りを実施するときだけ設定を変更するという運用も

可能です。しかし、アプリケーション内に独自のブラウザ機能を持っているものについては効果を発揮しないことなど、運用上のいくつかの課題があります。

そこで、予算が許すのであればDの方式が理想的です。この方法では標準ブラウザのSafariを利用可能で、学校でも自宅でも、通信手段としてLTEが利用できる場合でも、それぞれ同じフィルタリングの効果が得られます。この方法では標準ブラウザのSafariを利用可能で、学校でも家庭でも、通信手段としてセルラーが利用できる場合でも、それぞれ同じフィルタリングの効果が得られ、設定変更もクラウド上で行えます。

ただし、どの方式を利用する場合でも、フィルタリングは設定次第では過剰なブロッキング(教育上必要なウェブサイトブロックしてしまう)、またはその逆の過小なブロッキング(教育に関係のないサイトが閲覧できてしまう)のいずれをも引き起こされる可能性があります。フィルタリングは決して万能ではないため、生徒に対する情報リテラシー教育などの啓蒙活動も必要になります。これについては、本書の後半で詳しく説明します。



2. iPadのセキュリティ強化

端末を持ち帰ることにより、通学路や外出先での置き忘れや紛失などの可能性も出てきます。その際に、個人情報や生徒の大切な学習成果物を守るためにも、学校内での活用時以上にセキュリティが重要になります。特に、パスコードロックを設定していない状態で端末を紛失し、第三者に悪用された場合には、情報流出のリスクだけでなく、なりすましによるほかの生徒への被害なども懸念されます。持ち帰りを行う場合は、必ず以下のセキュリティ設定を検討してください。

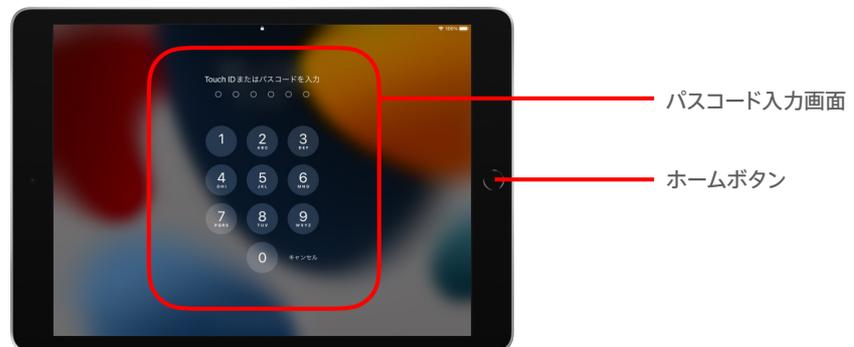
パスコード

iPadは、低学年であっても原則としてパスコードを設定することが推奨されています。設定を変更すれば4桁の簡単なパスコードを利用することもできます。また、パスコードの入力を一定の回数間違えると、iPad上のすべてのデータを消去するように設定することもできます。これは第三者が何度もパスコードの入力を試行したり、意図的にパスコードを何度も間違えた場合だけでなく、生徒本人がパスコードを何度も間違えた場合にも発生します。

Touch ID

iPadのロックを解除する度に毎回パスコードを入力する手間を省く効果的な手段の1つが、Touch IDを活用することです。iPadのホームボタンには、指紋による生体認証が可能なTouch IDが搭載されています。ホームボタンにあらかじめ登録した指紋を当てることで、ロックが迅速に解除できます。本人以外のなりすましを防ぐとともに、指紋を当てればすぐに利用可能になるので非常に便利です。

ただし、Touch IDを設定していても、一定時間ロックを解除していなかったときや、iPadを再起動したときにはパスコードの再入力が必要になりますので、Touch IDを用いる場合も生徒にはパスコードを必ず記憶しておくよう指導する必要があります。



3. ユニークIDの使用

iPadの持ち帰りにあたってセキュリティがより重要になることは、ここまででもお伝えしてきた通りですが、持ち帰りにおいては1人1台のiPadに対して「1人1つ」のユニークIDを用意することが基本的かつ重要な要件になります。Appleが提供する管理対象Apple IDは、教育目的での利活用に最適化されており、特定の機能が無効になります。管理対象Apple IDを割り当てれば、生徒たちが学習に集中できる環境を担保し、活用を毎日の生活全般に広げても安全に運用することができます。生徒自身が学習成果物や作品を保存して、学びに活用していく利便性も向上するので創造的な学びの実現にも最適です。

Apple IDのパスワード

Apple IDには、前の章で触れたiPadのロックを解除するための「パスコード」とは別のパスワードが必要になります。iPadのパスコードを学校や会社に入るための鍵だとすれば、Apple IDのパスワードはその建物内にある大切な自分専用のデータを格納するロッカーの鍵のようなもので、パスワードによってApple IDを安全に保護します。つまり、Apple IDがあればiCloudへのアクセスも可能になります。iPad上でApple IDとパスワードを入力した後も、パスワードの入力を求められることがあるため、パスコードと同様、生徒には忘れないようにしてもらうことが重要です。

管理対象Apple IDとは

Apple IDは通常、利用者が自分自身で設定することを想定したものとなっており、学校や教育機関などが全生徒のApple IDを一括で設定することはできません。そこで活躍するのが「管理対象Apple ID」です。

管理対象Apple IDは、学校などの教育機関が無料で登録できる「Apple School Manager」を利用すると、一括で大量に作成することができます。しかも、管理対象Apple IDは生徒が利用することが想定されており、App Storeからのアプリケーションの購入やインストールも不可能となっています。さらに、FaceTimeとiMessageについてはデフォルトでは無効になっており、生徒同士が(教師のみなさんが知らないところで)コミュニケーションをしてしまうことを防ぐことができます。これらの機能は「Apple School Manager」を用いて組織単位で有効化することもでき、教師にオンラインで相談するのに非常に便利な機能で、しかも無料で使用することができます。一定のリテラシー指導を行った上で有効化したほうが、特に持ち帰り学習の際には有効です。



教育機関が管理対象Apple IDを活用するメリットはほかにもたくさんあります。たとえば、自分専用のデータを保存できる「iCloud」の容量が、通常の5GBから200GBに無料でアップグレードされるので、手元のiPadに入りきらない高解像度の写真やビデオを安全な場所に保管できます。さらに、前述した「スクールワーク」など持ち帰り学習をパワフルに支援するアプリケーションでは、管理対象Apple IDと組み合わせることで生徒同士の共同編集が可能になるほか、iMessageの利用を許可している場合は教師のみなさんと生徒との間でメッセージ機能を使ったやり取りも可能になります。

生徒がパスワードを忘れた場合

管理対象Apple IDを用いる大きなメリットはもう1つあります。それは、IT管理者がいつでも生徒のApple IDのパスワードをリセットできることです。多くのiPadを利用していると、どうしても生徒が時々Apple IDのパスワードを忘れてしまいますが、個人で作成したApple IDの場合、本人でないとパスワードをリセットすることができません。しかし、管理対象Apple IDの場合、IT管理者は「Apple School Manager」上でいつでも対象の生徒のパスワードをリセットできます。リセット後は新しいパスワードが自動生成され、そのパスワードを生徒に伝達(生徒がメールを利用できる場合はメールでの送付を、それができない場合はパスワードを記載したPDFの出力をそれぞれApple School Managerから発行)すれば、すぐにIDを復元させることができます。

4.保護者への案内

iPadを持ち帰るための準備が整ったら、保護者への説明を必ず行いましょう。iPadに不慣れな保護者の不安を払拭することはもちろん、iPhoneやiPadに慣れている保護者にも学校で使われているiPadが安全性に配慮したものであること（たとえばフィルタリングやMDM、そして管理対象Apple IDなど）を説明することには意義があります。何よりも、iPadを持ち帰り日常の学習や課題に役立てることが、生徒たちの未来の可能性を広げることであり、教育機関がその点を重要視しているというメッセージを共有することが、保護者からの信頼につながります。熊本市など、すでにiPadの持ち帰りを実施している自治体が公開している資料や、この資料の最後で紹介している[関連情報](#)を参考に案内を作成し、以下を含む情報を保護者に届けましょう。

持ち帰る目的

iPadを持ち帰ることで、達成したい学びや、生徒たちに身につけて欲しいスキルについて説明しましょう。これからの社会で生きていくための重要なスキルである批判的思考力や、創造性、情報活用能力、クラスメートとのコラボレーション力を育み、創造的な学びを通じて生徒たちの可能性をさらに広げていくことを伝えます。

もちろん、「緊急時の学びの継続」や「ICTを活用することによる学びの効率化」という観点も保護者に伝え、学校としてこうした有事に備える目的もあることも含めます。

ルール

持ち帰り学習にあたり最も多くの保護者が不安になるのが「自分の子どもが長時間デバイスを利用したり、アプリケーションの不適切な使い方をするのではないか」といった、情報リテラシーに関することです。技術の進化は速いため、十分に指導できるかという不安は、教師のみならずはもちろん、保護者側にも常にあります。

しかし、保護者や教師のみなさんが一方的にルールや制限を規定してしまうと、それが生徒たちの可能性を大きく制限してしまう場合があります。厳しすぎるルールをこっそりと破り、そのことが報告されないために教師や保護者が知らない間に問題が大きくなってしまう可能性もあります。

そこで、「デジタル・シティズンシップ」の考え方を保護者のみなさんにも伝えましょう。これは、生徒たちが主体的にデバイスの利用方法や利用時の約束事を定め、課題が発生したときには都度生徒たちが話し合って約束事をアップデートしていくという考え方です。学習者の目線で作るものなので、最新の考え方や使い方が常に反映され、コミュニケーションを通して、子どもたちのことをさらに理解できます。

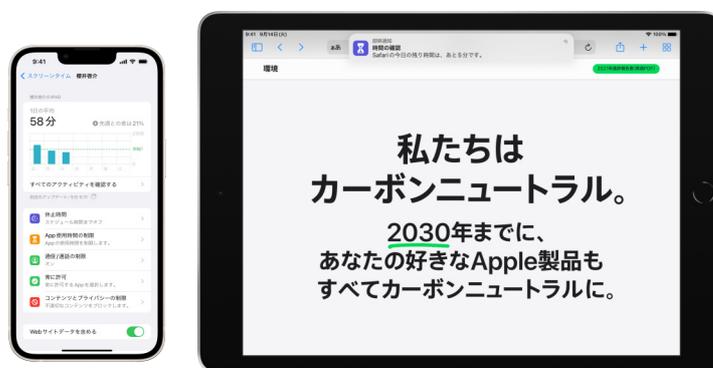
もちろん、生徒の安全に関わるような問題を回避するために最低限のルール（ここでは、教師や保護者などの大人たちが生徒に守らせる絶対的な指針となるもの）は必要ですが、生徒たちにとって「大人が決めたルール」は絶対的に見え、そう簡単には変えられないものという印象があります。一方で生徒たち自身で決めた「約束事」は、必要に応じて話し合いを経て変更や廃止ができるので、大人たちの定めるルールと生徒たちが定める「約束事」をうまく両立することで、最新の課題への対応をしつつ、生徒たちが主体的にデバイスの使い方を開拓していくことが可能になります。重要なことは、デジタル・シティズンシップの考え方は決して「生徒たちにすべてを決めさせ、大人たちが放任をする」ということではなく、安心・安全を担保するための最低限のルールはきちんと定めた上で、当事者の目線が必要な部分の自治を生徒たちに任せるといった意味合いです。この点を誤解がないように保護者にはきちんと伝えていくことが重要です。

スクリーンタイム

上記の「デジタル・シティズンシップ」の考え方や必要性は十分理解しつつも、各家庭における保護者の意見や重視している教育方針は異なる場合があります。そこで家庭においても、生徒と保護者が話し合いを通じて独自のルールを設定できることを、保護者にぜひ周知しておきましょう。その役に立つのが「スクリーンタイム」機能です。

スクリーンタイムを使うと、MDM経由で一括にて設定する制限に追加する形で、iPadごとに機能制限を設定することもできます。利用を制限したい時間帯を設定できるほか、保護者や生徒自身がiPadの使用状況（たとえば、どのアプリケーションを何分間使っているか）のレポートを見ることができます。これらのデータは、iPadの使い方を見直す上で参考になります。必要な場合は保護者や教師が「スクリーンタイム・パスコード」という専用のパスコードを入力することで、設定した制限を生徒に変更されないようにすることも可能です。

標準設定ではスクリーンタイムはオフになっていますので、各家庭ごとに独自のルールを定めてもらいたい場合には、この機能を有効にし、保護者に案内することで多様な要望に応えやすくなります。その際、学校での利用に家庭で設定した制限が影響しないよう、保護者が設定してもよい機能制限の範囲を適切にガイドしましょう。



おすすめの教材

無料で使える良質なインターネット上の教材を、授業や在校時間の制約を超えて多く利用できることは、iPadを自宅に持ち帰ることの大きなメリットです。特に、学校の授業でも使われることが多い映像教材や、より発展的な内容を取り扱う教材を使うことは特筆できる要素です。

一般社団法人モバイル・コンテンツ・フォーラムが、ITリテラシーがまだ十分ではないような子ども達を対象に作成した[リスト](#)に掲載されているコンテンツや、経済産業省が公開しているSTEAMライブラリー内の、[デジタルシティズンシップ教材](#)も役立ちます。

また、Appleも生徒向けの自習用教材や家族と一緒に取り組むアクティビティを無料で提供しています。



Wi-Fiへの接続方法

iPadを自宅に持ち帰り、上記のような優れた教材サイトにアクセスするには、各家庭でインターネットに接続できる環境が必要になります。そのため、自宅で利用しているWi-Fiへの接続方法については、学校から必ず保護者に対して案内をするようにしましょう。

[iPadユーザガイド](#)を参考情報としてQRコードをつけて保護者に展開したり、iPadのスクリーンショット入りの手順書を作成し、配布します。

一方で、もしセキュリティの都合などにより、学校以外の場所でiPadを使うときにはモバイル通信接続（セルラー経由でのインターネット接続）に制限し、各家庭のWi-Fiに接続できないようにしている場合は、その旨を必ず保護者に案内してください。特にモバイル通信回線は1ヶ月の間に使えるデータ容量が決まっていますので、生徒は計画的にデータ通信を行わないと、月末に自宅で課題に取り組もうとしたときにデータ容量が不足するという事態を招く可能性があることも、情報リテラシー指導の一環として伝えておくのと良いでしょう。セルラー経由でどのアプリケーションが多くのデータ通信をしているかは、[こちら](#)の方法で知ることができます。

iPadの充電

家庭での充電には電気代がかかります。iPadの充電を各自で行ってもらえるよう伝える際、このことをあらかじめ各家庭に通知しておくことが重要です。

5.紛失、盗難、故障時の対応

iPadの持ち帰りを行う際に、最悪の事態として生徒が端末をどこかに置き忘れて紛失したり、盗難にあってしまう可能性も想定しておく必要があります。また、登下校中に転倒などによりランドセルや通学カバンが圧迫され、画面が割れてしまったり、故障してしまう危険性もあります。そうした際に備えて、IT管理者が実行可能な対応策を知っておきましょう。

MDMでの作業

iPadが紛失・盗難にあった場合、最も怖いのはそれらの端末が悪用されることです。しかし、MDMはこうしたリスクを回避するために生まれたシステムですので、IT管理者が遠隔で端末をロックしたり、必要な場合はリセットをして本体内のデータを消去することも可能になっています。

これらのロックやリセットの指示はインターネットを通じて行います。そのため、iPadがインターネットに接続されていないと、こうした指示がiPadに届きません。一方でiPadがWi-Fi + Cellularモデルの場合は、iPadのバッテリーが残っていれば、これらの指示が端末に届く可能性が高くなります。なお、無事にiPadが見つかった場合は、iPadをインターネットに接続することでMDMからロックの解除を行うことは可能ですが、一度遠隔でデータを削除してしまった場合は、再設定が必要になります。再設定の方法や手順については、導入時の対応を行った事業者を確認してください。

AppleCare

すべてのiPadには、製品購入後1年間のハードウェア製品限定保証と90日間の無償テクニカルサポートがついています。その期間中を含め、校外で故障が発生した場合は、独自に修理対応をするのではなく、iPadを学校に返却してもらえよう保護者に伝えましょう。修理に出す前にApple School ManagerでMDMサーバからデバイスの割り当てを解除する必要があります。

関連資料(保護者案内用)

「iPadをインターネットに接続する」

support.apple.com/ja-jp/guide/ipad/ipad2db29c3a/ipados

「スマートフォン等のグローバルプラットフォームにおける我が国の子ども向けウェブコンテンツに関する研究報告」, 青少年コンテンツ研究会(一般社団法人モバイル・コンテンツ・フォーラム)

www.mcf.or.jp/temp/seisyonenhokoku2021.pdf

「経済産業省『未来の教室』STEAMライブラリー」

www.steam-library.go.jp/content/132

「Apple 製品のお手入れ方法」

support.apple.com/ja-jp/HT204172

「クイックガイド『Appleで学ぼう』」

apple.co/learningwithapple_JA

「キッズのためのクリエイティブなアクティビティ30」

apple.co/30creativeactivities_JP

「続・キッズのためのクリエイティブなアクティビティ30」

apple.co/morecreativityforkids_JA

「生徒の学びを深めるiPadのヒント30」

apple.co/30ipadtipsforsummer_JP

「プログラミングをはじめよう」

apple.co/quickstartcode_JP

事例から学ぶ

新潟市教育委員会

スクリーンタイムとMDM、フィルタリングを併用し、個々の家庭を巻き込んで安心して安全な学習環境を提供

“

家庭の権限を守りたい。
長期的な視点で考えると、生活全般として
情報活用能力を向上させていくことが必要で、
そのためには家庭・学校・地域全体で
意識を高めていくことが重要だと考えています。

”

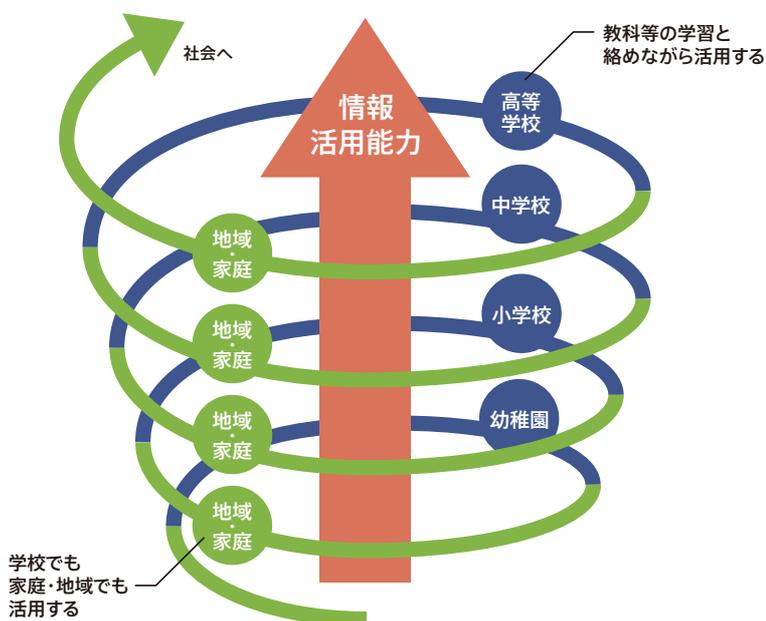
新潟市教育委員会学校支援課副参事・指導主事 片山 敏郎氏

概要

新潟市教育委員会は令和3年度の教育の情報化ビジョンとして、子供たちに「これからの社会をたくましく生き抜く力」を育成する方針を掲げ、その重点に「新潟で、世界で、通用する“情報活用能力”」を規定しています。市内の小中学校に配備されたiPadについて、「持ち帰り」による家庭での活用も推進しています。

方針

新潟市教育委員会が特徴的なのは、情報活用能力を「家庭・地域」と「学校」が連携して育成することを明記していることです。その具体的な施策として、MDMを「自治体として最低限度の安心・安全性を担保しつつ、必要なアプリケーションを配備するための仕組み」として運用する一方で、各家庭に対して「スクリーンタイム」を活用してもらうことで、家庭ごとに考え方が異なる端末の利用時間や利用可能なアプリケーションを「保護者が主体となって」設定できる考え方を導入しています。



運用方法

新潟市教育委員会では、小中学校でのMDMによる機能制限は一律して安心・安全を担保するための最小限の設定にとどめています。一方で、家庭ごとに多様なライフスタイルや価値観があることを踏まえ、iPadを利用できる時間帯は、「スクリーンタイム」で設定することを案内しており、これをどう使うかは各家庭で親子で決めることを原則にしています。家庭が意思決定の主体なので、PTAとの事前合意を前提とし、「スクリーンタイム」の設定方法などの不明点は学校やICT支援員で対応することになっています。

このような方針を理解してもらい、円滑に運用していくために、新潟市教育委員会では、[GIGA SUPPORT WEB](#)に新潟市教育委員会の考え方やスクリーンタイムの設定マニュアルなどを公開し、学校関係者だけでなく、保護者にも直接情報提供し、子どもたちがこれからの時代に必要となる力を身につけられるよう、地域コミュニティ全体での取り組みを進めています。



新潟市教育委員会での導入状況

iPadモデル	iPad第8世代 Wi-Fiモデル32GB
iPad導入台数 (2022年3月時点)	62,000台(小学校38,000台、中学校19,000台、中等教育学校700台、特別支援学校300台、教職員4,000台)
MDM	MobiConnect for Education
IDの管理	Azure Active Directoryで統合ID管理(Apple School ManagerとGoogle Workspaceへフェデレーション)
フィルタリング	有償クラウド型フィルタリングシステム
アフターサポート	AppleCare OS Support 動産保険(賃貸借契約期間中)
持ち帰りに 関する資料	動画「学習用端末持ち帰り活用のすすめ」(保護者の方向け) niigata-giga.info/news210616/ iPad持ち帰り時における家庭でのWi-Fi接続方法について niigata-giga.info/wp-content/uploads/2021/05/Wi-Fi接続簡易マニュアル.pdf スクリーンタイム設定方法(家庭用) niigata-giga.info/wp-content/uploads/2021/06/screentimeHome.pdf スクリーンタイム設定方法(学校用) niigata-giga.info/wp-content/uploads/2021/06/screentimeSchool.pdf